

サトリの
ココロ

[月1連載]

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗正蓮寺住職
奥邨正寛さん

第6回

私がいんげ保育園を立ち上げたのは、昭和52年のこと。近くに大きな集合団地ができて子どもが増えたため、子どもたちのための施設を作ってほしいと頼まれました。しかし私は、保育に関しての知識は皆無。偶然にも保母の資格を持つていた私の母を初代の園長、父を理事長として、試行錯誤しながらの出発でした。保育園は当時には珍しい鉄筋コンクリートの2階建て。大切な子どもたちを預かる「子どもの城」ですから、頑丈な造りにしました。

「ちゃんは母親が育てるのが基本」という考えがありました。だから最初の5年ほどは0〜2歳児は預からなかったのです。でも女性の社会進出が急速に進んでいた時代。乳児の保育も必要になってきました。預かった以上はきちんと育ててあげたい、難しいことは言わずに楽しく育てよう……そう思い、0歳からの保育もスタートしました。

子どものころは自分で工夫する世界を大切に

子どものころの体験で大切なのは、工夫すること。だから私の園では「あるもので工夫しなさい」と教えます。新しいおもちゃではなく、ペットボトルでいろいろなものを作ったりして十分楽しんでます。「三つ子の魂百まで」のことわざどおり、小さいころに覚えたことはしっかり身につきます。これが将来まで役に立つのです。

昔も今も、子どもたちは変わりません。変わってきているのは親のほうです。人の話が聞けない、自分の意見だけを通そうとする親の多いこと。「モンスターパーアレント」などという言葉も聞きますね。自己中心的で理不尽な要求をする親のことですが、実はそんな親たちも、どこかで寂しい思いを抱えているのだと気づきました。家庭内の問題や不満を抱え、自分で解決したくてもその手だてがない……。そんな母親たちと接するな

か、私はきちんと話を聞いてあげることが大切だと実感しました。自分の意見を聞いてほしいと思ったり、まず人の話を聞かなければならないのです。

人の話を聞き、関わりを持つことで信頼が生まれる

だから、やっかいな親だと放り出さず、まずは話を聞いてみる。むしろ逆に、関わり合いを深めてみる。そんな思いで3年前から、日曜日に近くのグラウンドで親子ソフトボールを始めました。親子で参加してもらいうちに、少しずつ変化が出てきました。「自分は信頼してもらっている」という思いが生まれたのでしょうか。いつしか積極的に保育園を応援してくれるようになったのです。

保育を通して大切なことは、子どもだけを育てるのではなく、親も先生も、一緒に育つて、学んでいくということ。自分の意見だけを通すのではなく、コミュニケーションを大事にすること。それは話を聞くことから始まります。

自己主張する前に 人の話を聞くことが大切

おくむら・しょうかん 昭和8年生まれ。日蓮宗正蓮寺(大阪府大阪市)第二十六世住職。住職を務めるかたわら、昭和52年に社会福祉法人蓮華会を立ち上げ、れんげ保育園の運営を始める。日蓮宗宗務総長を務めた後、平成21年までは日蓮宗保育連盟理事長として、日蓮宗寺院が運営する全国119施設の保育園・幼稚園の発展にも貢献。



此花区伝法にある正蓮寺は、毎年8月26日に行われる民俗行事「川施餓鬼」でも知られる。